

異教の神ペルーンとサルマチア

— ボブロフスキーの短編『異教徒たちの至福』について —

永 畑 紗 織

1. はじめに

ヨハネス・ボブロフスキーは、東ヨーロッパの歴史を掘り下げて、ヨーロッパにおける民族対立について考えようとした作家である。彼は1917年に東プロイセンのティルジットで生まれ、戦時中はドイツ兵として従軍し、戦後はソ連軍による捕虜生活を経た後、ベルリンに移住していた家族のもとへ帰還した。彼ら東プロイセン人たちは、戦後のドイツの領土縮小に伴い故郷を喪失し、故郷に戻ることはおろか、故郷に対する想いを口にするにも慎重であることを強いられた。彼は、ポーランド人・リトアニア人・ロシア人・ドイツ人・ユダヤ人が、それぞれの文化・風習を保ちながらも共存していた子ども時代の自分の故郷にユートピアを見ており、この故郷を失うという体験が、彼に民族対立の歴史や自らの罪に目を向けさせ、それらについての熟慮の結果が詩や小説となって、読者たちにも彼の問題意識を伝えることとなった。

この熟慮と創作の過程でひとつのキーワードとなったのが、サルマチアである。サルマチアとは、もともとはプトレマイオスの地図にも登場する古い地名であり、この語は、ポーランドの人文主義者マチェイ・ミェホヴィータが著した『アジアとヨーロッパの二つのサルマチア、およびその風土と住民についての論考』という書物により、16世紀のヨーロッパ知識人に広く知られることとなった。¹ ボブロフスキーはこの古い地名を借用し、現在のポーランド・バルト三国・ロシア西部・ウクライナ辺りの黒海北岸地域など、彼が子ども時代・兵士時代・捕虜時代を過ごした東欧全体を包括する概念として、サルマチアという語を用いた。この彼の心の故郷としてのサルマチアという概念は、彼の処女詩集のタイトル『サルマチアの時 (*Sarmatische Zeit*)』によって知られるようになった。² このサルマチアの地では、古来から様々な民族が暮らしていた

本稿では以下のテキストを使用する。Bobrowski, Johannes: *Gesammelte Werke*, Hrsg. von Eberhard Haufe, Stuttgart 1987-1999. (略記号 GW に巻数と頁数を付記) なお、V・VI 巻目は注釈書になっている。

¹ 詳しくは、小山哲「16世紀のサルマチア論におけるアジアとヨーロッパ — マチェイ・ミェホヴィータ『両サルマチア論』をめぐって」：京都大学大学院文学研究科『人文知の新たな総合に向けて — 第二回報告書I 歴史篇』2004年、257～276頁所収を参照。

² 詳しくは、神品芳夫／田中謙司 編『ボブロフスキー詩集』小沢書店 1994年の解説を参照。

が、諸民族が民族対立や国家の暴力によって苦しめられてきた歴史がある。

サルマチアが変容していく過程のひとつを扱った彼の作品に、1964年に書き上げられた『異教徒たちの至福 (*Die Seligkeit der Heiden*)』(GW IV, 91-96)がある。この作品はキエフの地がキリスト教化されていくさまを描いたもので、あらすじそのものはロシア史の本を読めば必ず載っているような話である。このような話を戦後のドイツにおいて、改めて作品化したボブロフスキーの意図とは何だったのかについて、考えてみたい。

2. 『原初年代記』との比較

『異教徒たちの至福』の舞台は、紀元千年頃のウクライナ、ウラジーミル1世支配下のキエフ大公国である。ウラジーミル1世は、大公に即位した直後には伝統的な土着の宗教を保護する政策をとったが失敗し、キリスト教を国教化することを余儀なくされた。この短編に描かれているのは、キリスト教国教化直後のことである。ウラジーミル1世の家臣たちによって、土着信仰の神、ペルーンを象った偶像である杭がドニエプル川へと投げ込まれる過程が、ここに描かれている。

Zdeněk Váňaによれば、ペルーンはスラブ神話の神で、雷や嵐を司り、戦士の守護神でもある。³ ボブロフスキーの詩『ペルーンの洗礼 キエフ 988年 (*Die Taufe des Perun. Kiew 988*)』(GW II, 327 f.)では、ペルーンは「火の神」とも呼ばれているが、これは稲妻のイメージによるものだろう。

ペルーンの偶像の形状は、『異教徒たちの至福』が収められた短編集⁴の表紙カバーに描かれた図版からも、知ることができる。ボブロフスキーに宛てた、ペルーンの絵を表紙に使うことを提案する手紙の中で、Felix Bernerは、ペルーンが『異教徒たちの至福』だけでなく、すべての物語の中に銀の顔をのぞかせているということを指摘している。⁵ 実際に、この短編に登場するモチーフは、上記の短編集に収められた作品に限らず、この短編より前に書かれたものも含め、多くの作品に散りばめられている。東欧諸民族が暴力的に変化を強いられた典型的な例として、ボブロフスキーは早い時期から、キエフの地のキリスト教化に着目していたのである。なお、この短編と何らかのモチーフを共有する他の作品については、論考中で必要があれば、そのつど参照したい。

キエフ大公国がキリスト教化されていく様子は、紀元約850年から1110年までのキエフ大公

³ Váňa, Zdeněk: *Mythologie und Götterwelt der slawischen Völker*. Stuttgart 1992, S.71.

⁴ Bobrowski, Johannes: *Boehlendorff und andere*. Stuttgart 1965.

⁵ Johannes Bobrowski oder Landschaft mit Leuten [*Marbacher Kataloge*, Bd. 46]. Hrsg. von Ulrich Ott und Friedrich Pfäfflin. Ausstellung und Katalog: Reinhard Tgahrt in Zusammenarbeit mit Ute Doscher. Marbach am Neckar 1993, S.739 ff.

国の歴史を記した『原初年代記』⁶ という書物に、記録されている。ボブロフスキーもこの短編を書く際、この書物を参考に行っている。(GW VI, 350) この短編の題材は、主にこの書物中の 988 年の出来事に関する次の記述から採られている。

彼〔ヴラヂミル〕は帰って来て偶像をひっくり返し、あるものは切り、また他のものは火にかけるように命じた。彼はペルンを馬の尾に結び付け、山からポリチェフ (の坂) をルチャイ (川) へ引っぱって行くように命じ、棒で叩くように十二人⁷ の家臣をつけた。〔中略〕(ペルンが) ルチャイ (川) をドネプルへ引っぱられて行くと、不信心な人々はそれを悼んで泣いた。彼らがまだ聖なる洗礼を受けていなかったからである。そして (人々は) 引っぱって来て、それをドネプルに投げ込んだ。ヴラヂミルは命じて、「もしも (ペルンが) どこかに漂っていたら、お前たちは浅瀬を通り過ぎるまでそれを岸から突き放せ。(通り過ぎたら) それをほっておいてよい」と言った。彼らは命じられた通りにした。(人々が) (ペルンを) 突き放して (ペルンが) 浅瀬を通り過ぎたとき、風がそれを中州に打ち上げた。このために (人々は) そこをペルンの中州と呼んだが、今でも (そう) 言われているのである。⁸

そのほか、ウラジーミル 1 世の治世が始まった 980 年の出来事を記した次の記述も、この短編やボブロフスキーの他の作品に材料を与えている。

ヴラヂミルは一人で公としてキエフを治め始め、丘の上の塔邸の外に偶像を立てた。頭が銀で口髭が黄金の木製のペルン、ホルス〔中略〕である。(人々は) それらを神と呼び、生贄を捧げ、自分の息子や娘を供えていた。(人々は) 悪魔たちに生贄を捧げ、自分たちの生贄で大地を汚していた。ルシ〔＝キエフ大公国〕の大地とその丘は血で汚されたのである。だが至善の神は罪人たちの死を望まなかった。いまその丘には教会が建っており、(それは) 後に述べるように聖ヴァシリイの教会である。⁹

⁶ この論考では以下のテキストを使用。『ロシア原初年代記』(國本哲夫／山口巖／中条直樹 他 訳) 名古屋大学出版会 1987 年。ボブロフスキーが参照したのは、*Die altrussische Nestorchronik*. (Übersetzt v. Reinhold Trautmann) Leipzig 1931.

⁷ 『異教徒たちの至福』では、家臣の数が 16 人と書き換えられている。ウラジーミルと家臣たちをイエスと 12 人の弟子たちに擬える視点を嫌ったためだろうか。

⁸ 『ロシア原初年代記』、130-131 頁。() 内は訳者、[] 内は論文執筆者による。

⁹ 同書、93 頁。

ウラジーミル 1 世は、自ら作らせたキエフの丘の聖地のペルーンの偶像を、その 8 年後に排斥することとなったわけである。ボブロフスキーは、上記の記述に基づいて、銀色の頭部をした偶像としてペルーンを描き、¹⁰ 上記の記述を膨らませて、ひとつの短編を作り上げたわけだが、『原初年代記』に記されたペルーン排斥の過程と比べて、『異教徒たちの至福』のどこに独自性があるかに注目すれば、ボブロフスキーの意図は自ずと明らかになるだろう。

『原初年代記』にはなく、この短編に独自に盛り込まれたものとして、注目すべきは、まず『異教徒たちの至福』というタイトル、そしてこの作品の冒頭と終盤に登場する鹿のレリーフを持つ謎めいた男と「光」の描写、「赤」い色彩である。これらについて検討することで、ボブロフスキーの意図を探ろう。

3. 「異教徒たちの至福」

「異教徒たちの至福」という語を、ボブロフスキーは、1773 年にヨハン・ゲオルク・ハーマンによって書かれた『至福にあずかるソクラテスの追想録への付け加え』¹¹ から学んだ。(GW VI, 350) ハーマンの同時代人であるヨハン・アウグスト・エバーハルトは、『新ソクラテスの弁明 もしくは異教徒たちの至福の教義の研究』¹² を著し、その中で、それまでのキリスト教の「異教徒は天国に行けない」という教義に反駁したのだが、それに対する反論をハーマンは上に挙げた文章の中で唱えたのである。ボブロフスキーはこの議論を踏まえて、『異教徒たちの至福』を書いたと考えられる。

彼はこの短編の中で、異教の神をキリスト教の神と同一視する視点を呈示している。それは、ペルーンが昇天していく記述から読み取れる。早瀬にペルーンが沈んでいく記述の少し後に、次のような文章がある。

あらゆる道がそこへと向かって上っているそれらの塔へ、ドクソロジー、その長い賛歌は歩を進めた。天が開かれたからだ。後背に包まれ 2 人の天使に支えられながら昇っていった聖なる方 (Pantokrator) を受け入れるために、かつてオリーブ山の上でそうであったように、今日、ぽっかり大きな円形に。(GW IV, 94)

¹⁰ この短編以外にも、例えば、『ギリシアの歌 (Das griechische Lied (Kiew 986))』(GW II, 275 f.)の中には「ペルーンの／木製の碑、黄金の髭で／色褪せた銀の顔」という詩行がある。

¹¹ Hamann, Johann Georg: Beylage zum Denkwürdigkeiten des Seligen Sokrates. In: *Sämtliche Werke*. Bd. III. Hrsg. von Josef Nadler. Wien 1951, S.111-121.

¹² Eberhard, Johann August: *Neue Apologie des Sokrates, oder Untersuchung der Lehre von der Seligkeit der Heiden*. Berlin und Stettin 1778.

天が開かれたことを、キリスト者たちはキリスト教的な聖なる現象だと思い、塔へと上っていくのだが、実際には、天が開かれたのは、ペルーンを受け入れるためである。それは、後に引用する箇所、ペルーンが「開かれた空に向かって」「昇っていく人物」だと書かれていることから明白である。

聖書中に、イエスの昇天の際に天が開いたという記述はないが、使徒言行録の1章9-12節によれば、イエスの昇天はオリーブ山で行われた。つまり、「オリーブ山の上でそうであったように」という表現から、上の引用箇所において、ペルーンのこの世からの立ち去りがイエスの昇天になぞらえられていることが分かるのである。

また、詩『ペルーンの洗礼 キエフ 988年』の中で、ペルーンの新しい名がエリヤだと書かれていることから知る事ができるように、イスラエルの民の預言者であるエリヤは、ペルーンと同一視されていた。ボブロフスキーが参考にしたカール・ローゼの著書の中にはこうある。

最初期のロシアの教会が預言者エリヤの名において建てられたことは非常に特徴的である。火の車に乗って天へ昇って行った預言者エリヤの人物像を、稲妻と雷の神としてペルーンを崇拜する異教徒のロシア人たちの神のイメージに合致させようとしたことは明らかである。聖エリヤはロシアの民の観念の中では決して聖書中の預言者ではなく、むしろキリスト教化されたペルーンなのである。¹³

ユダヤ教・キリスト教の聖典である旧約聖書中の預言者であるエリヤと、ペルーンが結び付けられるということは、異教・ユダヤ教・キリスト教の境目が曖昧であるということである。¹⁴

「天が開く」という表現について言えば、これはヘルダリンに倣ったもの¹⁵で、『子どもの頃 (Kindheit)』(GW I, 6f.)・『ユーラ川 (Die Jura)』(GW I, 9f.)・『アレクシス・キヴィ (Aleksis Kivi)』(GW I, 40f.)など、ボブロフスキーの詩のいくつかにも登場する。聖書中で、開かれた天が登場する場面といえば、イエスの洗礼の場面である。マタイ伝の3章16節には、「イエスは洗礼を受けると、すぐ水の中から上がられた。そのとき、天がイエスに向かって開いた」と書かれている。つまり、このペルーンに対して強制的に施された洗礼がイエスの洗礼に擬えられていることが、「天が開く」という表現から読み取れるのである。

このように、ボブロフスキー自身は、キリスト教的なものと同教的なものとの境目を、曖昧な

¹³ Rose, Karl: *Grund und Quellort des russischen Geisteslebens. Von Skythien bis zur Kiewer Rus*. Berlin 1956, S.59 f.

¹⁴ マタイ伝の16章14節や17章10節によれば、イエスをエリヤの再来と見なす者もいたようである。

¹⁵ „Dichterberuf“ など。(GW V, 21)

ものとして捉えようとしたわけだが、この短編は、国家がその曖昧なものにきっちりと線引きをしようとした出来事を描いているのである。

『原初年代記』によれば、ペルーンが川に突き落とされた日の翌朝、ウラジーミルの命令により、キエフの民衆たちは川で集団洗礼を受けた。天が開くという表現は、この地に神の霊が降りてきて、この地がキリスト教化されることを意味しているとも考えられる。異教の時代からキリスト教の時代への移行が、ウラジーミルの命令によって規定されているのである。

別の箇所、ペルーンを受け入れようと天に開いているのは白い円だという記述があるのだが、この白い円は、ペルーンに彼の時代の終焉を知らしめる。ボブロフスキー作品の中には、wissen（知る）と結びついて、大きな状況の変化を知らしめる役割を持つ Weiß（白）が登場するものはいくつかある。¹⁶ さらに、彼の作品において、「白」はキリスト教のイメージとの結びつきを持つ。ドイツ騎士団を扱った詩『クリストブルク（Christburg）』（GW II, 299 ff.）の中に、「あの騎士たちのマントのように白い」とあるように、「白」はドイツ騎士団のマントの色である。さらに、ボブロフスキーの作品における「白」は、新約聖書中のイエスの変容について記述したマタイ伝 17 章 2-3 節「イエスの姿が彼らの目の前で変わり、顔は太陽のように輝き、服は光のように白くなった。見ると、モーセとエリヤが現れ、イエスと語り合っていた」と強い関わりを持っていると考えられる。聖書中のこの箇所におけるモーセはユダヤ教を、エリヤは異教を代表するものとして、彼はとらえたのであろう。キリスト教（国のもの）とユダヤ教（のもの）、もしくは、異教（のもの）の出会い（衝突）の場面に、しばしば、「白」と「光」は登場し、それはなんらかの大きな変容を伴うのである。また、Eberhard Haufe が白はリトアニアにおいては死の色である（GW V, 93）ことを指摘しているように、「白」は死とも結びつきを持つものであると考えられる。例えば、『クリストブルク』には、「その古い民族、¹⁷ 闇の中の民族、森の民族の死の白い歌」とある。『異教徒たちの至福』においても、白い円へと昇っていくことは、ペルーンのある意味での死を表現している。つまり、「白」という色彩が、ペルーンの時代の終焉とキリスト教化を知らしめているのである。

異教とキリスト教の境界を曖昧なものと捉える立場を呈示していることから、ボブロフスキーは異教の神も尊重しようとする立場であったと考えられるが、どのような意味を込めて、彼が「異教徒たちの至福」という言葉を用いたのかについて、考えてみたい。この言葉は、この短編中に一度だけ登場する。その箇所を検討してみよう。

¹⁶ 詳しくは拙論：「ヨハネス・ボブロフスキーにおける闇と光 — 『ねずみのおまつり』を中心に」：京都大学大学院独文研究室『研究報告』21号（2007年）。

¹⁷ ドイツ騎士団によって滅ぼされたブレッセン族。（GW V, 365）

だが、そこでスヴァトポルクとスヴァトスラフは戦い、ボリスとグレブは自らを殺害する者を待ち構えていた。その時にはもう、異教徒たちの至福はルーシ中を駆け抜けた。火と殺戮を伴って。(GW IV, 96)

火と殺戮を伴って、異教徒たちの至福がルーシ（＝キエフ大公国）中を駆け抜けたという表現は、キエフ大公国中で、キリスト教国教化の方針に従わない異教徒たちが殺されたことを意味する。『原初年代記』はキリスト教の立場から書かれたものであるため、民衆が喜んで洗礼を受けたと伝えているが、ニコライ・ニコリスキーが、「執拗に古い信仰を守っていた他の住民層の洗礼については、年代記は興味あふれる物語を詳細に書きとどめているが、それが証明するように、家臣団の支配下にあった住民たちは棍棒をもってキリスト教の天国に追い込まねばならなかったのである。」¹⁸と書いているように、民衆の洗礼が暴力的に行われたことは、『原初年代記』の記述の端々にも読み取れる。想像力の乏しい者でも、突然の洗礼の命令を皆が皆、喜んで受け入れるはずのないことは容易に想像できる。

では、異教徒たちの至福について書かれた文の直前にある、スヴァトポルクらに関する記述は何を意味しているのか？ まず、ここに出てくる人物たちについて確認しておこう。ウラジーミル 1 世には 11 人の息子がいたが、長男であるスヴァトポルク 1 世は、ウラジーミルに殺害されたヤロポルクの息子であり、ウラジーミルにとっては継子にすぎなかった。合法的な公位継承者とみなされていたのは、一説によれば、弟グレブとともに、ビザンツの皇女アンナとの間に生まれた息子であるボリスである。¹⁹ ウラジーミルの死後、スヴァトポルクは、国の唯一の支配者になるべく弟たちを排除することを画策し、まず弟のボリス公を殺害した。その数日後にはその弟のグレブも殺害された。このふたりは、キリストの模範に従い、自らの生命を犠牲にする決意をし、スヴァトポルクに抵抗することなく死んでいったとされ、その行為のため列聖された。スヴァトポルクはさらに、ドレヴリャーネ地方をおさめていた弟のスヴァトスラフも捕えた。²⁰ 結局、ウラジーミルの跡を継いだのは、在位は 4 年と短かったものの、スヴァトポルクであった。

ウラジーミルの息子たちは、キリスト教を国教化した者の息子であるという立場上、民衆の模範となる敬虔なキリスト教徒であるべきはずだが、そのキリスト教徒たちの間で行われたのは殺戮であった。²¹ 自らの利益ばかりを重視した公位継承戦争を行うスヴァトポルクのようなキリス

¹⁸ ニコライ・ミハ일로ビッチ・ニコリスキー『ロシア教会史』（宮本延治 訳）恒文社 1990 年、9 頁。

¹⁹ 現代では、ボリスとグレブが同一の母アンナの子であるという説には異論を唱える研究者が多い。

²⁰ 和田春樹 編『ロシア史』山川出版社 2002 年、46 頁以下。

²¹ 詩『ペレレンの洗礼 キエフ 988 年』には「戦いは橋の上で永遠に続く」とある。この詩において「橋の上」はウラジーミルがいる場所である。

ト教徒と、救済され天に召される異教徒たちの対比に、何を見ることができるだろう？

それはひとこと言えば、暴力的なキリスト教化への疑念である。ボブロフスキーは、10代の頃から聖書サークルに入って聖書に親しんでいたし、戦後、ベルリンに移ってからも、熱心なキリスト教徒であり続けた。つまり彼は、キリスト教に対して否定的だったわけでは決していないが、国家の暴力によってなされる国家の利害のための信仰の強制には、疑問を感じずにはいられなかったのだろう。異教徒たちにとって、キリスト教の天国に行くことが「至福」であったかどうかは疑わしいが、ボブロフスキーは、至福にあずかり得る存在としての異教徒たちとの対比において、ウラジーミルの息子たちの一部が自分の利害のための非本質的なキリスト教信仰者であることを強調したのである。

次に、「異教徒たちの至福」という言葉と並んで、この短編に独自に盛り込まれたモチーフである、鹿のレリーフを持つ謎めいた男に注目する。

4. 鹿のレリーフを持つ男と「光」

その男は、この作品の冒頭に登場する。彼は、色褪せて灰色になった毛皮の短いコートの上に、鉄でできたような顔をのぞかせている。落ちくぼんだその眼には「光はもう当たらないだろう」と書かれているし、その額へ向かって伸びる灰色の髪は「光を受け入れない」と書かれている。この男は、駆ける鹿をモチーフとした銀製のレリーフをもっているのだが、その金属の上に捕らえられてそこに留まろうとする「光」を見たその男は、「手で光を拭い去り」、その銀製品を毛皮のコートの中に隠す。まるで「光」から守ろうとするかのように。(GW IV, 91)

初めの1ページだけで「光」という語が3度繰り返して登場するのである。先にも述べたように、ボブロフスキー作品においては、「光」が重要な役割を果たすことが多い。この作品においても然りである。まずは、この作品において「光」がどのような意味を持っているかを見ていきたい。

先に登場したこの男は作品の後半において、語りかけられ、問われる。何を見ているのかと。「滲んだ空、そして煙、今はひとりの人物を見ている」と彼は答える。その続きを引用する。

昇っていく人物、灰色の、岸辺の緑色の光の中から、河の上を昇っていく、ひとりの人物を、暗い、ひとつの杭、もう飛んでいる、猛り狂う鳥、翼はないが、開かれた空に向かって、彼の方に、その引きずられし者、突き落とされし者、早瀬の中に葬られし者の方に向かって沈んでくる、黒く輝く、光、— 彼の銀製の顔は輝きを放っている、今、回転しながら、まるで満ちた光が彼に当たっているかのよう — その銀が滴って、むきだしになった木材が輝くまで、一人の男であるドニエプル川に洗われて。野の上に立っていたあの杭を、生贄の脂で輝いて、血で自らを黒く染めたあの杭を。

杭は昇っていく、いまなお、杭は消えていく、光の中で、天は彼を受け入れる。

そこから彼は戻ってこないだろう。(GW IV, 95 f.)

ここで使われている、人物・杭・引きずられし者・突き落とされし者などの諸々の語はすべて、ペルーンを指している。ペルーンの昇天と、その代わりに降りてくる「光」が、ここに描かれている。

話が重複するが、ボブロフスキー作品において、強い力を持った「光」は、大きな変化、何かの終わりと始まりを表現する場面に現れる。例えば『ベーレンドルフ (Boehlendorf)』(GW IV, 97-112) では、ベーレンドルフの葬儀の日の場面で、『ねずみのおまつり (Mäusefest)』(GW IV, 47-49) では、無邪気な時間が終わって現実が突きつけられる場面で、『立ち去りたい (Ich will fortgehen)』(GW IV, 61-67) でも、無邪気な時間の終わりと現実を受け入れざるを得ない時間の到来の場面で、それは登場した。²² 言い換えれば、無邪気な子供時代のような時間を過ごせる場所としての故郷であるサルマチアとの完全な切り離しを表現する場面に、強い「光」が登場するのである。そしてまた、その切り離しには、必ずドイツ等の大国の影響が関係している。強い力を持つ「光」は、それぞれの登場人物たちに苦痛すら与える、もしくは、それぞれの登場人物たちの苦痛すら表現するものだが、注意しておかねばならないのは、ボブロフスキー作品において、光は淡いものである限りは心地よいものである、ということである。

上の引用箇所において、旧来のサルマチアは既に終焉を迎え、キエフ大公国というひとつの大国の色に染められ始めている。上の引用箇所に出てくる光という言葉のうち、「岸边の緑色の光」だけが複数形である。これはこの「岸边の緑色の光」だけが、旧来のサルマチアに属するペルーンにとって心地のよい光であることを表している。多神教の、異教の神々が君臨する時代の、複数形の光、それに対して、それ以外の単数形の「光」は、キリスト教的な「光」なのである。ペルーンが昇っていくのに対して、「光」が降りてくることからそれは分かる。多様な神々、多様な共同体が乱立する状況を許さず、ひとつにまとめてしまおうとする大国的な「光」とも言えるかもしれない。

「光」の中に消えていくペルーンを見守る、冒頭にも登場した男が何者であるかは、明言されない。だが、「光」を拒絶する態度や「灰色の髪」という表現から、おそらくは異教徒のひとりであるだろうと推測できる。上の引用箇所、昇天していくペルーンが灰色の者と言われているように、ボブロフスキー作品においては、古い伝統に根ざす土着の者は、灰髪頭の老人として描かれることが多いのである。この男の眼にもう光が当たらず、この男の髪が光を受け入れないの

²² 詳しくは先述の拙論を参照。

は、ペルーンが支配していた異教の世界が影の国²³のものになったことを示しているのだろう。ペルーンにはもうスポットライトが当たることはなく、彼は古い時代の亡霊となる。ペルーンの偶像も、銀が滴り落ちるまでドニエプル川に洗われて、もう銀色に輝くことはない。彼の「光」に対する拒絶は、キリスト教的な「光」に対する拒絶である。杭である偶像のペルーンは「手を持たぬ」ので、自分へ降り注ぐ「光」を振り払うことができなかったが、この異教徒の男は、その手で「光」を拭い去るのである。

では、彼が「光」から守ろうとしている鹿のレリーフは、何を象徴しているのか？

ボブロフスキーの詩『拒絶 (*Absage*)』(GW I, 73)の中に、ペルクーンという神が登場する。ペルクーンとは、古プロイセンとリトアニアの天と雷を司る最高神で、スラブの神ペルーンとは類縁関係にある。(GW V, 76)『拒絶』の中でペルクーンは、「ヘラジカの蹄の跡を残してやってきた」と言われている。ヘラジカがペルクーンを象徴しているように、鹿はペルーンを象徴していると考えられる。レリーフが銀製であることも、鹿のレリーフがペルーンの象徴であることを裏づける。また、本文中で、レリーフに描かれた鹿は「叫ばない鹿」だと書かれて、詩『ペルーンの洗礼 キエフ 988 年』の中で「彼〔ペルーン〕は叫ばない」と書かれていることから、鹿がペルーンを象徴していることを裏書きし得る。²⁴ また、鹿は、地と水の動物である蛇と対置される、天と火の動物であり、「水で生きるすべてのものを火で、息も詰まりそうな日照りで、破壊する」。²⁵ 水を用いて洗礼を行い、水を求めるように主を求めるキリスト教徒に対置される火の神ペルーンは、鹿に象徴されるのである。

そして同時にまた、人間にとっての鹿の重要性が高かったサルマチアにおける狩猟・採集の時代も、このレリーフは象徴している。この短編は、狩猟・採集の時代が終焉に近づきつつある時代を描いているのだ。そのことは、冒頭の男が立っている寂しげな場所に、「忘れられた道具、柳で編んだかご、弦が切り離され、ばらばらに砕かれた弓」があることから読み取れる。実際に紀元千年頃に、この地における狩猟・採集の時代が終焉に近づいたかどうかは問題なのではなく、従来のサルマチアの変容を描く上で、狩猟・採集の時代の終焉を暗示することが必要だった

²³ 「影」はボブロフスキー作品を読み解く上で重要な語のひとつである。彼の第二詩集のタイトルは『影の国 河たち』である。

²⁴ 『異教徒たちの至福』の草稿の中に「憐みたまえの歌が今なお駆け巡り〔中略〕至るところに叫びがあった。〔中略〕鹿が新鮮な水を求めて叫ぶように。」(GW VI, 348 f.)という文言があるが、これは、旧約聖書中の詩編 42 編 2 節の「鹿が新鮮な水を求めるように、主よ、私の魂はあなたを求めます。」から取られたものである。この箇所における「叫び」は、主を求める叫びであり、このことと関連付けて考えると、「叫ばない鹿」という表現は、ペルーンのキリスト教の神に対する拒絶とも考えられる。だが、草稿の段階では存在したこの文言が削られたのは、鹿にキリスト教的な意味を込めることで生じる混乱を避けるためだろう。

²⁵ 『世界シンボル大事典』大修館書店 1996 年、448 頁。さらに鹿は「原初」の状態としばしば関係付けられること、また、鹿の象徴的意味と狩りの象徴的意味が結び付けられることも、この事典に指摘している。

のである。²⁶ また、このレリーフには、「幾重にも枝分かれした角のある鹿」が描かれているとあるが、枝分かれした角は肥沃・豊穡のシンボルであり、²⁷ このレリーフは、サルマチアの豊かな大地をも象徴していると考えられる。さらに言えば、幾重にも枝分かれしているものの、根っこは同じ一頭の鹿であるその角は、多種多様な民族を意味し、鹿は様々な民族が共存するサルマチアの地を象徴している。

そのような複合的な意味を持つレリーフに留まろうとする「光」を、異教徒の男は追い払うのだが、それはどういう意味を持つのか？ それはつまり、旧来のサルマチアをキリスト教的な「光」から守ろうとする行為だ。キリスト教世界では「光」は善のシンボルであるが、ペルーンにとって、それは必ずしも善ではないだろうし、ボブロフスキー作品においては、(淡い光を除く)「光」は明白化を象徴する。曖昧さを許さず、事態をクリアにするのが「光」の役割である。それは一見、良いことのように思われるかもしれないが、多様な民族がきっちり線引きされることなく入り混じりながら生きてきたサルマチアの地においては、必ずしもそうではなかった。キリスト教的な「光」に支配されるということは、この地が一元化され多様性が失われるということである。だが、ペルーンがコートの中にレリーフを隠し続ける限り、旧来のサルマチアはキリスト教的な「光」から守られる。つまり、サルマチアの多様性は未だ保持されているのである。ひとつの強大な力の勢力の中に収斂され得ない多様性が、「光」を浴びることなく隠れているのである。そこに描かれた鹿が「叫ばない鹿」だと言われているように、半ば封印された形で、ではあるが。

キリスト教的な「光」の中に消えていって、「そこから戻ってこないだろう」と言われているペルーンだが、彼は本当にその地を去ってはいないのだ。本文によれば、ペルーンはあの早瀬から逃れたという噂があったようなのである。(GW IV, 96) 彼は異教徒たちの中で生き続けているのだ。

レリーフを持った男は作品の終盤で、川の最上流の「もはや道が存在しないのだから、もはや道に迷うこともない場所」へと向かっていった。²⁸ その「森が始まる場所」、「霧が舞う場所」では、霧がこの世界の曖昧さを守っている。表面上、儀式を通してペルーンの時代は終わったが、ペルーンの魂は異教徒たちの中に生き続ける。キリスト教化は確かに大きな変化であったが、旧来のサルマチアは、いまだ保たれているのである。ペルーンの名は、「打つ」・「壊す」を意味する。²⁹ ペルーンの力は、ひとつにまとめあげる方向ではなく、大国を解体する方向へと働き、サルマチアの地の多様性を保持するのである。

²⁶ 狩猟・採集が従来のサルマチアを象徴するものであることは、『三つの視点』(GW IV, 336) から読み取れる。

²⁷ 『世界シンボル大事典』、448 頁。

²⁸ この記述の後、草稿には、「なお多くの者が彼についていく。ペルーンが置き去りにした者たちが」とある。

²⁹ Váňa, S.71.

5. 「赤」

「異教徒たちの至福」の章で、ボブロフスキーが多神教の異教の神を尊重する立場であることが明らかにされたことから類推できるように、彼は宗教の多様性、ひいては民族の多様性を尊重する立場をとっていると言えよう。キエフのキリスト教化は、統制のとれた共同体を築くために人々の意識を統一するイデオロギーが必要で、また政治的・商業的にキリスト教化した方がよい事情があったために、国家から強制されたものであり、ボブロフスキーはそのような画一的な方向へと働く力に疑念を抱いていたと考えられる。

死後に発見され、1963年1月頃に書かれたと推定されている、ボブロフスキーが自らの文筆活動の方向性を整理した『三つの視点 (3 Gesichtspunkte)』(GW IV, 336) という文章の一部を紹介する。

新石器時代に始まった狩猟民族、漁労民族、採集民族の定住化、土地の所有、土地との絆、それは本質的には現代まで続いた。こうした時代は終わる。この時代とともに、故郷、郷愁といった観念、政治的には、愛郷心へとつながってゆく民族国家や国民意識も消えてゆく。

各大陸は接近し合い、工業技術が広範囲における単一の思想を可能にする。

こういうことを意識しながら私は、決定的に消え去ってゆく世界の概観を、生活空間へのこのような絆がとりわけ深く理解されてきた地域として構想する。〔中略〕

それが完全に消えてしまう前に、もう一度、適切な描き方で描く。

つまり、現代は世界が画一化されていく時代であり、そのことを意識しながら、自分は失われゆく世界を、それが完全に失われる前に描くという旨のことが書かれているのである。画一化を批判するような言葉はそこにはないが、画一化される以前の世界を描くことを自分の使命だと考えていたからには、それに対する何らかの執着があったはずだ。また、土地を所有する時代が終わると言っていることから、この文章は、東側社会を念頭に置いて書かれていることが分かる。

この『三つの視点』の文章には、1960年代に東ベルリンで書かれたというその状況が、如実に反映されている。東ベルリンはソ連と密接な関係にあったわけだが、この頃のソ連では、「宗教はアヘンなり」とする共産主義の方針に従って、1960年から62年までに教会の約三割が取り壊されたと言われている。共産主義のイデオロギーによって、神なき世界への画一化が図られたわけである。この当時とられていた民族政策も、一概には言えないが、民族間の差異を軽視し、諸民族の融合を促進するようなものだったと言われる。共和国の指導部が自立の萌しを見せた場合には、厳しい引き締め措置がとられ、民族自決が妨げられた。ソ連はその国家の成立以来、諸民族

を保護する政策をとってきたが、少数民族の保護は人种的・技術的・財政的に困難であったため、共和国を持つような大きい民族へ、少数民族が同一化されていくことになり、むしろ少数民族の切り捨て・民族の規格化につながっていき、フルシチョフ指導下では特に、「諸民族の接近と融合」が強調され、諸民族の独自性は失われる方向へと動いていった。諸民族を保護する形式をとることで、社会主義化を促進することができるという考えは、既にレーニンの時代からあったのだが、あらゆる政策は、ソ連という大国から各共和国が逃げないようにするためのものとなったのである。強烈な力を持つイデオロギーが、各共和国を少しずつソ連色に染め上げようとしていた。³⁰

そういった動向や、『共産党宣言』の中の「プロレタリアは祖国を持たない」という文句が、『三つの視点』の中の、この時代とともに故郷・郷愁・民族国家などがなくなり、各大陸は接近し合い、単一の思想が可能になる、という考えに結びつく。西ドイツとの強いつながりも持つ稀有な東ドイツ人作家であったボブロフスキーは、西側から見たソ連や東ドイツの状況も、いくらか把握できていたと考えられる。それでも、東ドイツに住んでいた彼は、時代状況的に、共産主義的な画一化を批判することはできなかった。だが、複数の民族がそれぞれの民族性を維持しながら共存していた故郷に、ボブロフスキーがユートピアを見ていたことは、彼の作品に触れればすぐにわかることである。

これらのことを踏まえて、この論考の冒頭で掲げた問題に戻ろう。すなわち、千年前のキエフの地におけるキリスト教化の話を、なぜボブロフスキーは1960年代のドイツにおいて、改めて作品化したのか、という問いである。

ボブロフスキーがスラブ神話の神にまつわる話を扱うのは、現代における問題について考えるためであることは明白で、それは先に挙げた『拒絶』が現在の自分自身のあり方を考える詩であることや、同様にペルーの登場する詩『ネリー・ザックスに寄せる (An Nelly Sachs)』(GW I, 119 f.) がナチ時代を扱うものであることから分かる。

『拒絶』は、現代社会への拒絶を表現した詩である。2連目でサルマチア平原が描かれ、3連目にペルクーンが登場し、最終連である4連目にはこう書かれている。

そこに

私はいた。古き時代に。

新しいことはついぞ始まらなかった。私は夫であり、

妻とひとつの体となり、

³⁰ ソ連の民族政策については、塩川伸明「ソ連言語政策史再考」：『スラヴ研究』46号（1999年）、155～190頁所収を参照した。

生まれた子どもたちを育てる、
不安なき時代のために。³¹

この4連目に現れる「新しいことはついぞ始まらなかった」という文は、旧約聖書のコヘレトの言葉1章9節「かつてあったことはこれからもあり、かつて起こったことはこれからも起こる。太陽の下、新しいものは何ひとつない」から取られたと考えられる。つまり、この詩は、ペルクーンの時代から人類が一切進歩していないこと、人類が過去に犯した過ちを繰り返していることを指摘しているのである。「新しいことはついぞ始まらなかった」という文は、『原初年代記』の中で、人々が洗礼を受けたことを讃えて作者が引用した、パウロの「古いものは過ぎ去り、見よ、新しいものが実現した」³² という言葉のアンチテーゼともとれる。

この詩の冒頭に

火よ、
血でできた魅惑—
素晴らしい人間。そして眠りのように
過ぎ去ったもの、夢の数々は
川を下っていく
水の上を
帆もなく、流れにまかせて。

とあるが、この「素晴らしい人間」は、「血」でできた魅惑、つまり「赤」、共産主義における未来の人間を意味しているとボブロフスキーは口頭で説明したという。(GWV, 76) これが事実であるとすれば、この箇所は、詩の言語で不明瞭化された共産主義批判なのではないか。「素晴らしい人間 (der schöne Mensch)」は、あまりにも皮肉に満ちた響きを持っており、その上、それは血から生まれ、人々を魅惑するが、過ぎ去った夢と同列に置かれるものであり、方向さえ定まらずにただ流されていくだけなのである。ソ連の強い政治的影響下にある東ベルリンで、ボブロフスキーは現在と過去に思いを馳せ、自分にできるのは子どもを作り育てることだとうたって、詩を締めくくるのである。

³¹ 『ボブロフスキー詩集』では、この語について「詩人の拒絶は現代社会の一切に向けられている。そして太古の人間たちのような生物学的営みに生き方を限定しようと望んでいる」という解釈が記されている。また、この詩を訳す上で『ボブロフスキー詩集』を参考にした。

³² 『ロシア原初年代記』、133頁。

ボブロフスキーは、捕虜時代にソ連でアンチファシズム学校へ派遣され、長期にわたって共産主義思想を叩き込まれた。そして、ソ連から帰国したばかりの1950年初頭、先に帰国していた仲間たちに、手紙で、自分は共産主義者になったと伝えた。だが、その後、共産主義者という自己理解は、社会主義の中に生き、それを原則的には肯定するキリスト教徒という方向へと急速に変化し始めたと、Eberhard Haufeは伝えている。(GW I, XXXVI) また、ボブロフスキーが1960年にCDU(キリスト教民主同盟)に入ったのは、もちろんUnion Verlagでの仕事との兼ね合いもあるが、SED(ドイツ社会主義統一党)入党への圧力を避けるためだったと、Arthur Hermannは言っている。³³ ボブロフスキーが共産主義についてどう考えていたか、正確に知ることは不可能だが、こういった情報から察するに、当初は受け入れた共産主義思想に、次第に一定の距離を置きたいと考えるようになり、それでも共産主義社会の中で上手く生きていくために、それを否定することは取敢てしなかったのだと想像できる。

『拒絶』の中で特殊な意味を持った「赤」という色は、『異教徒たちの至福』においても、ウラジーミル1世が登場する場面で、強い印象を与えている。その箇所を引用する。「ウラジーミルはかぶとを脱いで、馬の首の付け根の辺りに置いた。赤いマントを着た騎士の一群を両脇にしたがえ、鞍の中で身を起こした。赤い鞍覆いの布の上で。」(GW IV, 92) 共産主義の「き」の字もない時代の物語だが、ロシアの始祖とも言えるキエフ大公国の騎士たちのマントや鞍覆いを「赤」にしたことに、作為を感じないはいられない。これは、「赤」の国の人々が周辺諸民族を同じ色に染め上げようとする状況を描いた物語なのであり、この物語は単なる遠い過去のも物語として読まれるべきではないのである。

「新しいことはついぞ始まらず、千年前に異教徒たちが苦痛を味わったのと同様に、今も国家の暴力によって、宗教や民族の多様性が危険にさらされている。そのことを危惧して書かれたのが、『異教徒たちの至福』ではないだろうか。

『異教徒たちの至福』の中に、あと2ヶ所、注目しておきたい「赤」が登場する文がある。そのひとつは、3章で引用した「聖なる方を受け入れるために」という文の直後にある、「エドムから来る、赤い服を着てボズナから来るその者は誰か?」という文である。この文言は、イザヤ書の「主の復讐」について書かれた章である63章からの引用である。(GW VI, 352) イザヤ書における、この問いに対する主の答えはこうである。「わたしは勝利を告げ、大いなる救いをもたらすもの」。さらに、なぜ服が赤く染まっているのかを問われた主は、こう答える。

諸国の民はだれひとりわたしに伴わなかった。わたしは怒りをもって彼らを踏みつけ、

³³ Hermann, Arthur: Johannes Bobrowski und Litauen. In: *Annaberger Annalen. Jahrbuch über Litauen und deutsch-litauische Beziehungen* 6 (1998), S.147-159, hier S.155.

憤りをもって彼らを踏み砕いた。それゆえ、わたしの衣は血を浴び、わたしは着物を汚した。わたしが心に定めた報復の日、わたしの贖いの年が来たのでわたしは見回したが、助ける者はなく、驚くほど、支える者はいなかった。わたしの救いはわたしの腕により、わたしを支えたのはわたしの憤りだ。わたしは怒りをもって諸国の民を踏みにじり、わたしの憤りをもって彼らを酔わせ、彼らの血を大地に流れさせた。(イザヤ書 63 章)

ここに現れるのは、思い通りにならなければ報復をする、エゴイスティックで残虐な神の姿である。残虐でありながら、自らを「大いなる救いをもたらすもの」だと考えるその姿勢は、キエフの地にキリスト教を導入した、キエフ大公国の大公の姿に、重ね合わせることができるのではない。

ウラジーミルを取り囲む「赤」は、諸国の民を踏みにじり、彼らに流させる血の色を象徴し、それが同時にキエフの地へ無理やりに導入されたキリスト教への懐疑を表現し、さらにそれが、ひとつのイデオロギーのもと、「大いなる救い」のために諸国の民を踏みにじることになってしまった共産主義のイメージにつながっていく。

この短編中のもうひとつの注目しておきたい「赤」が登場する文は、ペルーンの杭が引きずられていく描写の後にある、「そして草の下を脈を流れる赤色が砂の上に跳び上がった」である。³⁴

詩『ユーラ川 (Die Jura)』(GWI, 9 f) の「赤い 鉾石」や詩『オオタカ (Der Habicht)』(GW II, 315 f) の「草が始まるころ、赤い鉄の鉾石の上の砂」など、ボブロフスキーの詩の中には、自然の中の「赤」が表現されているものがいくつかあるが、これらの「赤」は『異教徒たちとの至福』の中の上記の「赤」と関連していることが明白である。『ユーラ川』は、開かれた天や白髪頭、生贄の地の黒の中に立ち脂で輝く異教の神パトリンペ、砂の痕跡、火など、『異教徒たちの至福』と共通するモチーフを多く含んでいるし、『オオタカ』の上に挙げた箇所が、『異教徒たちの至福』中の「赤」が登場する箇所とよく似ているのは、見てのとおりである。

これらの詩との関連から、「草の下を脈を流れる赤色が砂の上に跳び上がった」というのは、ペルーンの杭が引きずられたことによって、草や砂が押しつけられて、埋もれていた赤い鉾石の色が見えるようになったことを描写していることが分かるが、この「赤」にボブロフスキーは、ペルーンが引きずられたことによって流れた血を見ているのである。

³⁴ 「赤」はこの短編中に、もう一度だけ登場する。「その男は立ち止まった。彼は毛皮の下の胸元に銀製のものがあるのを感じている。彼は天、その白い円を見上げる。彼は丘の方へと歩み寄る。踏みにじられた草、掘り起こされた痕跡、砂を染めた色褪せた赤を越えて。」これは本文中で引用した箇所を受けてのものである。

6. おわりに

ここまで、キリスト教に改宗した者たちは加害者であり、ペルーンは被害者であるかのような話を繰り返したが、それが全てではない。「生贄の脂で輝いて、血で自らを黒く染めたあの杭」と表現されているように、³⁵ ペルーンも残虐な神であり、キリスト教の Pantokrator に擬えられているということは、ペルーンも怒りで民を踏みつける神（の子）なのだ。ボリスとグレブ、スヴァトスラフが死んでいったのは、ペルーンの報復だったのかもしれない。だからこそ、より敬虔なキリスト者ほど先に殺されていったのだ。「異教徒たちの至福が駆けぬけた」という表現は、異教徒たちが殺されていったことを表現すると同時に、ペルーンが報復に成功したことが異教徒たちにとって「救い」であったことをも表現している可能性がある。詩『ペルーンの洗礼 キエフ 988年』の中の「戦え、彼〔ペルーン〕は言う、／戦え、我が子らよ」という詩行もまた、ペルーンが報復を煽る、決して穏やかでない神であることを裏付けている。

つまりこの物語には、どちらかが善でどちらかが悪という単純な構図は存在しない。それは諸民族の融合が善であるか悪であるか、判断できないのに似ている。ひとつになるための暴力、分裂するための暴力、その両方が存在するのだ。

ボロフスキーは、多民族が入り乱れて暮らす東プロイセンに生まれながら、国家の力によって、東欧諸民族とドイツ人の間に線引きがなされ、さらに東ドイツと西ドイツの間にも線引きがなされ、東ドイツがひとつのイデオロギーに支配された時代に生きた。彼はその故郷に多文化・他民族が共存していた時代を知っているだけに、多様性を許さない動きには敏感にならざるを得なかった。キエフの地の強引なキリスト教化も、ひとつのイデオロギーの下に画一化を図った共産主義国家も、多様性に対する不寛容という問題を孕んでいる。そして、共産主義国であるソ連が崩壊した後も、『異教徒たちの至福』の舞台である黒海沿岸地域では、民族紛争が続いている。この短編が扱う、統制をはかる国家と多様な民族というテーマは、今も変わらず重要な問題なのである。

³⁵ ペルーンが流させた血は黒、キリスト者が流させた血を象徴するのは赤、というふうには、区別されている点にも留意されたい。

Perun und Sarmatien

— Über Bobrowskis Erzählung „Die Seligkeit der Heiden“ —

NAGAHATA Saori

Johannes Bobrowskis Erzählung „Die Seligkeit der Heiden“ handelt von der Christianisierung der Kiewer Rus im Jahre 988. Zu fragen ist, warum Bobrowski in den sechziger Jahren in Deutschland diesen Stoff aufs Neue bearbeitet hat und wie er dabei vorgeht.

Das zentrale Ereignis der Erzählung, die Beseitigung des Götzenbildes der slawischen Gottheit Perun durch den russischen Fürsten Wladimir, entnahm Bobrowski der im 11. Jh. verfassten Nestorchronik, wobei er seinerseits manches neu hinzufügte, so den Gedanken von der „Seligkeit der Heiden“, die Figur des Mannes mit dem silbernen Relief eines Hirschs, zudem Licht und Farben. Diesen Zusätzen gilt das besondere Interesse meiner Untersuchung.

Der Titel der Erzählung geht auf Johann Georg Hamanns Auseinandersetzung mit Johann August Eberhards „Neue[r] Apologie des Sokrates oder Untersuchung von der Seligkeit der Heiden“ (1772) zurück. In Bobrowskis Werk wird Peruns Entschwinden aus der irdischen Welt der Himmelfahrt Christ gegenübergestellt, was heißt, dass Bobrowski auch einer heidnischen Gottheit Achtung entgegenbringen konnte. Die „Seligkeit der Heiden“ wird dann am Schluss aus dem Kontrast zu den negativ gezeichneten Christen, die vor Mord und Totschlag nicht zurückschrecken, abgeleitet.

Einer dieser Heiden ist der Mann mit dem Hirschrelief, der „das Licht nicht annimmt“, sich und den geretteten Kultgegenstand davor zu schützen sucht und sich mit ihm tief in die Wildnis zurückzieht, wo „es keine Wege mehr gibt“. Gefragt danach, was er bei seinem Fortgang erblicke, spricht er sowohl von „Lichtern“ als auch vom „Licht“. Die „Lichter“ im Plural gehören zur Natur, in der Perun daheim ist, also zur Welt des Polytheismus, das „Licht“ im Singular aber, das aus dem Himmel herabkommt, verweist auf die Welt des monotheistischen Christentums, das auf

Grund seiner Absolutheitsanspruchs keine Vielfalt erlaubt und die Welt vereinheitlichen will.

Der auf dem Relief dargestellte Hirsch könnte ein Symbol Peruns sein, gleichzeitig symbolisiert er aber auch mit seinem „vielfach verzweigten Geweih“ die Vielfalt des alten Sarmatien. Dass der Mann das Relief dem einzigen Licht nicht aussetzen will, heißt, dass er das pluralistische Gefüge Sarmatiens trotz der durch die Christianisierung bewirkten großen Veränderungen weiterhin zu erhalten sucht. Obwohl äußerlich die Zeit Peruns durch die in der Erzählung beschriebene Zeremonie endet, lebt seine Seele dort weiter. Der Name Perun bedeutet „der stark Schlagende“ oder „der Zerschlagende“. Seine Macht zielt nicht auf Vereinheitlichung, sondern auf das genaue Gegenteil: Er zerteilt große Reiche und erhält so Sarmatiens Vielfältigkeit.

Was Religion und die Bewahrung der Identität eines Volkes betrifft, so vertrat Bobrowski die Position eines gemäßigten Pluralismus. Diese Annahme wird u.a. dadurch gestützt, dass er zum Beispiel den Polytheismus nicht pauschal ablehnte. Wladimir zwang das Volk in der Kiewer Rus zur Taufe, weil er eine das Volk einende Ideologie brauchte, um das expandierende russische Reich zu stabilisieren, und weil die Christianisierung vorteilhaft für Außenpolitik und Handel war. Den Gebrauch von Gewalt zur Erreichung solcher Ziele aber konnte Bobrowski nicht gutheißen.

Wladimir, der sich von Perun lossagt, hat in der Erzählung „einen Schwarm Reiter mit roten Mänteln zu beiden Seiten“ und erhebt sich selbstbewusst „im Sattel, über dem roten Satteltuch.“ Ein Vergleich mit dem thematisch verwandten Gedicht „Absage“ zeigt, dass die rote Farbe hier auf die UdSSR der frühen sechziger Jahre, in denen Bobrowski das Werk verfasste, zu beziehen ist, und man kann darin eine Aufforderung sehen, die Erzählung nicht nur als eine Geschichte aus ferner Vorzeit zu lesen, denn das Thema des zentralistisch regierten Vielvölkerstaates, für den die Bewahrung staatlicher Einheit oberstes Prinzip ist, spiegelt auch die politische Situation der sechziger Jahre wider.